

Musashino University Creative Happiness Incubation

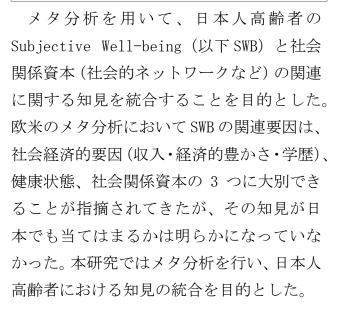
## 武蔵野大学しあわせ研究所通信 Vol.168

2025年11月6日発行

日本人高齢者における Subjective well-being と社会関係資本の関連 に関するメタ分析

福沢愛・中川威・竹内 真純・

Sala Giovanni



これまで、1次スクリーニング、2次スクリーニングで適格性評価を行ってきた。適格性評価では、事前に決めた基準に則り、データベースの検索でヒットした論文を分析に加えるか否かを評価する。本プロジェクトでは、幸福感が測定されていること、相関係数などの統計量が報告されていること、平均55歳以上の日本人対象の査読付き論文であることなどを基準とし、1本の論文につきアルバイトを含む2名のコーダーで判断した。

1次スクリーニングでは、データベースで 文献を収集し、重複を削除した 2866 論文の 抄録を確認することで適格性評価を行い、 1468 本が採択された。2 次スクリーニング では、採択された 1468 論文の本文から適格 性評価を行い、221 本の論文を選出した。こ のうち、コーダー間で評定の一致しない 109 本については、現在協議中である。

令和6年度には2次スクリーニングを行うのと同時に、選出された論文の内容に関してもレビューを行った。日本人高齢者においては、SWBだけではなくモラール(心理的動揺、老いに対する態度、孤独感、不満足感)など、高齢者特有のwell-being指標が多く測定されていること、社会経済的要因よりも、健康状態や社会関係資本とwell-beingとの関連に関する知見が多いことが明らかになった。

レビューの結果、日本人高齢者の「しあわ せ」研究では、今現在の肯定的感情や happiness など短期的な well-being だけで はなく、モラールのような高齢者特有の well-being が重視されていることが明らか になった。モラールは SWB より前に提唱さ れた well-being 指標であるが、これまで欧 米の研究ではあまり扱われてこなかった。 これまでにも、「しあわせ」の意味が日本と 欧米では異なるなどの文化差が指摘されて きた。身体的健康状態が悪化しやすい高齢 期には、短期的なwell-being だけではなく、 心理的安定や老いた自分の受容が日本人高 齢者にとっての「しあわせ」につながる可能 性が示された。これらのことから、今後のし あわせ研究には、文化的視点や世代差の視 点が欠かせないことが明らかになった。

世界の幸せをカタチにする。 Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University Creating Happiness Incubation

武蔵野大学しあわせ研究所 電話:03-5530-7730

東京都江東区有明3-3-3

メール:mhi@musashino-u.ac.jp